

小

さくても住みやすいまち。住民のつながりはとても強く、結束力があります」

南三陸町で食品関連企業を営む山内正文氏は、まちの特徴をそう話す。南三陸は隣接する石巻や気仙沼ほどの規模はないが、名産のタコをはじめ、アワビやカキなどの漁業と水産加工で活気ある港である。だが2011年3月11日に押し寄せた遼上高20メートルを超える津波は、まちの6割を超える建物を飲み込んだ。山内氏は津波を見た瞬間、壊滅的被害を覚悟したという。しかし、すぐに気を取り直しまちの再建を誓った。

「震災翌日には、避難所の中学校で自治会を組織しました。住民の結束と協力のおかげで、不便な避難生活でも混乱は起こりませんでした。人と人がつながる、素晴らしいまちだと思います」

◆住民には見えない復興の速さ

まちは復興へ動き出すが、当時の様子を南三陸町復興市街地整備

「進展具合を知りたくても、どこに聞きに行けばいいかわからないというのです。町役場は敷居が高くて入れないし、URが何をやっているのかもわからない。住民の要望は、復興が動いていることを知りたいという点にありました」
そう土田は語る。そこで、URは復興の様子がわかる「南三陸復興まちづくり情報センター」の開設を提案する。土田が続ける。
「何をやっているかわからないという状況を何とかしたい。復興が進んでいる事実を知ってもらおうことで、みなさん



南三陸町長自らが町民に復興状況を詳しく説明する

復興の「現場」が見えるまち

宮城・南三陸町震災復興まちづくり事業

(2012年◆平成24年から実施中)

新田匡史

につた・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata



変わる日本の「暮らし」と「まち」

32

課の菅原義明課長補佐が語る。「復興計画を作れと言われたのですが、途方に暮れましたね。これだけ大規模な事業の経験などなかったですから」

URは、震災から4カ月後には職員2名を町役場に派遣。URとしてできることを探りながら、復興計画策定の支援を始めた。「経験も実績も豊富なURさんが応援します、がんばりましょうと言ってくれたことが心強く、おかげでやる気も出てきました」

復興計画には、佐藤仁町長の強い決意が反映された。高台移転である。UR南三陸復興支援事務所所長の土田公生はこう話す。

「町長は『二度と人の命を犠牲にするようなまちづくりはしたくない』とおっしゃっていました。住民からは低地に戻りたいという声も上がりましたが、その姿勢がぶれることはなかったですね」

URは、志津川地区の3つの高台造成と低地部の区画整理、それに災害公営住宅の建設を担う。

い、と。彼らは、波の音で海の状態を判断しているというのです」

菅原課長補佐は、高台からでも波の音は聞こえるという。それを知ってもらうだけでも、現場に立つ意味はある。町は提案を受け入れ、通常は入ることできない現場が開放されることになった。

9月上旬、現場には多くの住民が訪れた。そこには実際の工事に使用される重機が展示され、試乗もできる。子どもたちは歓声をあげて運転席に乗り込み、一様に「楽しかった」「すごかった」と興奮気味に語っていた。

住民はいよいよ掘削の現場に案内される。実際に重機が山を掘削し、ダンプに積み込まれた土砂が運搬され、締め固めるまでの作業が実演された。一つひとつの作業が丁寧に解説され、住民はその都度感嘆の声を上げた。

「震災後、ここに新しいものができるとあって考えられませんでした。でも、これを見て復興の実感が湧いてきましたね」



「6割が壊滅したまちを復興するには、町だけでは無理です。URさんのノウハウがあるからこそ実現できると思います。ただ、復興で大切なのはスピード。URさんには、無理を承知でスケジュールの前倒しをお願いしています。実際に期待に込めてくださっています、早くと要求しています」

佐藤町長はそう言うが、復興事業が迅速に進んでいることが住民に伝わっていません。

「目の前のハードルを越えようと懸命な私たちにとって、3年半はあつという間です。しかし、進展が見えない住民には、非常に長い時間だったと思います」

日々住民と接するURのもとにも、さまざまな声が寄せられた。

参加した住民の1人はそう話していた。佐藤町長は語る。

「子どもたちがはしゃぐ姿に癒されました。大人も笑顔でよかったです。現場を見て復興の光が見えたからこそ、笑顔になられたのだと思います」

今回開放されたのは、3カ所の高台のうちの一つだ。イベント終了後、住民からは他の2カ所も見たいという声が上がった。復興は着実に進んでいる。ここ南三陸のように進展が見えるようにすれば、住民に安心と希望を与えられるのではないだろうか。

◆住民を実際の工事現場に招く

さらにURは、あるイベントの開催を町に提案した。復興を肌で感じられるよう、造成中の高台を見学してもらおう試みた。移転を決めた人が現場を見て、復興後の生活を想像する意味は大きい。移転を躊躇する人にとっても、現場を体験することで印象が変わる可能性もある。菅原課長補佐は忘れられない話があるという。

「高台移転の合意をいただいたとき、漁師の方からこう言われました。高台に移転するのが嫌なんじゃない。海は見えなくても波の音だけは聞こえるところにしてほし

街に、ルネッサンス



一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

[企画制作] 新潮社